グッドライフ？

宇治金時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グッドライフ？

【Ｎコード】
Ｎ５５３７Ｘ

【作者名】
宇治金時

【あらすじ】
恋愛の女神に見放されたとしか思えない非モテ男とその対極に位置する幼馴染の小さなお話。ほかにも書いている話があるのでこちらは気晴らし程度に更新します。

モテない俺とモテすぎる君（前書き）

気晴らし程度に更新とか言っても、今書いてる話の更新率もいい方じゃないですな。まあ、自分のペースで頑張ります。

モテない俺とモテすぎる君

自慢じゃないが時田義男（ときたよしお）は生まれてこの方モテたためしが無い。まあ、その時田なる人物は何を隠そうこの俺なのだが。クリスマスは毎年、父と母と共に過ごし家族の絆を深める。バレンタインにはやはりおかんからの心の篭ったチョコレート（最近は永森の板チョコ）と二つ下の妹からの手作りチョコ（中学入学以来ここ何年か貰ってないけど）が俺に贈呈されている。

絵に描いたような非モテライフを送る俺には、下駄箱にラブレターとか、放課後に伝説の木の下で意中の子から愛の告白なんていう時間経過と共に美化され続けるであろうキラキラしたイベントなどあるはずも無く、のっけから自分の非モテアピールなどして一体俺が何が言いたいかというとだね。もう諦めた。

俺には向いてない。モテようと努力をした時期もあったが、その頃の自分に言ってやりたい。無駄な事に時間を使うなと。その時間をもっと何か有意義な事に使えと。恋愛だけが青春の醍醐味じゃないだろ。もっとほかに、あるだろ。絵を描いたり。運動したり。友達と旅行に行ったり。いくらでもさあ。

なのに俺ときたら。彼女がいる＋青春－甘酸っぱい思い出＝なんだか素晴らしいみたいな方程式を勝手にくみ上げた挙句。その解に至る前の途中式の段階で暗礁に乗り上げ。早々にクラスの女子から見限られてしまったのだから笑うしかない。

以来、俺が話すのは男ばかりあっちも男、こっちも男本当に男汁溢れる学生生活だよ。女子には俺が男色の気があるとの噂が流れているらしいが、誤解を解く気にもならないし、解いたところでその労力に見合った何かが俺に帰ってくるとも思えないので、放置しておく。

だから今も、俺も隣を歩いているのは幼馴染の美少女などではなく。幼馴染の美少年だ。顔のパーツを全てオーダーメイドでこさえ

たような丹精なお顔をお持ちの俺の幼馴染、池谷啓吾（いけや けいご）は先日見た映画について語っていた。
「ベターな話だけど、感動した。泣いたよ」
彼が熱弁を奮いっている映画の名前はドーバー海峡の中心で愛を叫ぶという映画についでだ。ドバチュウ等と一昔前に流行った携帯ゲーム機のソフト『手のりモンスター』、略してテノモンに出てきた某人気キャラの鼠テノモンのような略称のそれは、付き合いだした女の子が、映画の中盤以降に不治の病に冒されてしまい。話の最後で主人公が彼女の遺骨を指定の場所に撒きに行くという内容の話しだ。
何故俺が未だに劇場で放送されている映画の内容を知っているのかは想像に難くないだろう。
「俺も見たから分かってるよ。しかもお前と……その話映画見てから同じ話何回するんだよ？いい加減頭を切り替えなさい」
「いや、あの感動を忘れたくない。忘れちゃいけない。だから感動が定着するまでお前には俺の話を聞いてもらう」
「何だその目茶苦茶な理屈は。大体、恋愛もの映画を野郎二人で見に行くってどうよ？俺はお前から誘いを受けたときは、ドバチュウと一緒に上映されてる『今迎えに行きます』とか『ラストマサライ』とかのつもりだったんだが、何でまたドバチュウ？野郎と見るもんじゃねえよあれは……」
確かに俺も不覚にも涙が出そうになったシーンが幾つかあるのだが、その度に横に座る池谷の存在を思い出してなんとも複雑な心境になったものだ。当然周りは男女のカップルが多く、野郎二人で恋愛ものの映画を見ている俺達は傍目にどう見えたのか一抹の不安を覚える。正直一人で来たほうが１００倍マシだった。
「別にいいじゃん。見たかったんだし。それに面白かったじゃん」
「まあ、そうだけどよ」
「それに知らない女の子と見に行くより気心の知れた奴と見たほうが……イテ！何で叩くの？」

池谷の言葉通り、俺はやつの事を叩いた。それも結構強い力で。俺は柔道の道場に通っているので膂力にはそこそこ自信がある。さぞ痛かろう。

「なんかあれだ。持つものが持たざるものに見せる余裕みたいなものにカチンと来た」

「どういう意味？」

「お前は自分がモテるのが当たり前だと思っているようだがな。モテる奴にはそれなりの理由と要素があるんだ。モテる奴の中でもお前は別格だ。色々な要素が揃いすぎてる。それは神さまが気まぐれで起した奇跡なんだよ！生まれた瞬間に宝くじに5回連続で当選したようなもんだ。このアンポンタンが！」

ただイケメンなだけならいざ知らず。腹の立つことにこの男。頭脳明晰、スポーツ万能、おまけに男女問わず人望厚いと、遠めに見ている分には非の打ちようが無い。

実際深く付き合ってみるとこの男それだけではなく天然で無神経ある事に気が付く。

でも、

「そっか。でもそれは気のせいだよ。俺は時田の方が凄いと思うんだ。きっとお前は本当に見る目のある女子に好かれてるよ」

こういう奴だから。嫌いになれないんだよな。

「まあ、見る目のある女子とやらが、目茶苦茶性格悪い奴かもしれんがな」

そんな俺の皮肉を隣の幼馴染は力強く否定してくれた。

「それはありえないよ。時田みたいな変わり者を好きになる子はきっと観音様みたいな子に違いないから」

ああ、今のは失礼だよ池谷君。君とは長い付き合いだけど。そういう事を言った後どうなるか君も分かってるだろうに。分かるよね？

俺は池谷の頭を今度こそ手加減せずに力の限り引っ叩いた。

俺と日記と面倒事（前書き）

ほかの話も書いてはいるのですが、書いては消し書いては消しの繰り返しです。……それって結局書いて無いじゃん。

俺と日記と面倒事

今日、池谷を引っ叩いた数分後の俺はひどく動揺しいていた。その出来事から数時間が経ち、日記を書いている今ですらなんとも妙なものを拾ってしまったという後悔の念で、上手く頭の整理がついていない。

よって今から書く日記の内容に整合性などという言葉はかけらも存在しないわけだが、誰に見せるわけでもないのでまあいいだろう。

池谷を引っ叩いた直後のことは、日記の中に書き記すまでもない些事である。よって詳しい事は割愛するが、彼は残りの下校路でのひと時ををまるまる俺の暴力への不当さを訴えることに使っていたのを覚えている。

俺はそんな池谷の言葉を華麗にスルーしつつ家路を急いでいたのだ。いつもの様に一足早く家に着いたのは池谷だった。あいつと俺の家の距離は距離にして僅か十数メートルしか離れて居ないのだが、不精者の俺にはその僅かな差すら羨ましかったりする。

ぼやいても家が近寄って来るはずはないし、いざ近寄ってきたらそれはそれで怖かったりするので俺は自分から住み慣れた実家へ歩を進める。

池谷と俺のの家は隣接はしているが互いの家が背を向けあっているような位置関係である。俺の家の正門は東側池谷の家の正門は西側についているため。俺は池谷と自分の家の塀をぐるりと迂回する事になる。

まあ、いつものことなのでこれはいいのだ。問題はその後である。正門近くに到達した俺は、そこでとてつもなく面倒なものを拾ってしまった。

勉強机に向かいガリガリと日記を書いていた俺は、そこまで書き進めてから、このことをどのように書こうか迷った。自分しか見ない日記ではあるが、それでもこのことをどのように記せばいいのだろうかと悩む程度にはわけの分からん事体であるという事だ。

俺は玄関先で拾ったそいつから詳しい話を聞くために先ほどからそいつが座しているベッドが置いてあるほうに体を向けた。いつも俺が使っている簡素なベッドにちょこんと座る少女。それが俺が拾った面倒なものだ。家の前に倒れていたそいつを見た俺は若干パニクっていた。救急車を呼ぶことも思いつかず、かといってそのままにしておくわけにもいかず、人目に付かないように家に運び込み。両親と妹に見つからないように部屋のベッドにそいつを寝かせてから思ったものだ。

俺は犯罪者かと。

とにかくそういった経緯を差し引いてもそいつの外見は特異なものだった。どう考えても自然な色ではないエメラルドグリーンの髪の毛にダークパープルの瞳を備えた風貌は異様としか表現できないのだが、奇抜なのは髪の毛や目の色だけではない。妙な素材で出来た恐ろしくＳＦチックな衣装に身を包んでいるのだ。赤がベースの半袖の上着には両胸を縦断する形で太目の白いラインが走っている。上着の肩の辺りには鳥を象られたエンブレムが付いている。その下

に黒い長袖のアンダーを着込み、下半身には同色のスカートと黒のレギンスのようなものがはかれている。腰の辺りには警備員がつけるような黒い帯そくが撒きつけられていてポーチと白い棒状のものが差されていた。秋葉原とか後楽園にいるよな、こういう人。
少女はおとなしく座ったままじっとこちらを眺めている
「それで、お前、何？」
少々ぶっきらぼうな口調になってしまったが、女性と話す経験が圧倒的に不足しているのだ。多めにみて欲しい。
「ラティ」
「それはお前の名前か？」
その問いにゆっくりと頷く少女。それにしても無口なやつだな、こいつ。
「そうか。お前はどうして家の前で倒れていた？」
「さっき説明した通り」
そう、俺はさっきこいつから大体の事を聞いている。にもかかわらず同じ事をしているのは、こいつの話が突拍子がなさ過るからだ。
「事故って言ってたな。次元がどうこうとか」
「次元穴（じげんけつ）に巻き込まれたの。生きて出られただけ幸運だった」
「お前の言うそのじ、じげんけつ？そりゃなんだ？」
「次元に開いた穴。だから次元穴」
分かりやすい説明ありがとう。余計に混乱してきた。
「じゃあ、お前はなんだ、その。もしかして、そんなことはないと思うが、言ってもおかしい奴とか思わないでくれよ」
「……？」
これから口にしようとしている事が物凄く恥ずかしい。概念や創作物の設定としては知っている程度のとんでもない話だからだ。目の前の少女は怪訝そうな顔でこちらを見ている。
「お前って、もしかして異世界人？」
「だから、そう言っているのだけど。翻訳機の調子が悪いの？この世界の言語体系は交流のある世界と似ていると思ったんだけど」

「いや、さっきのお前の説明が理解できなかったわけじゃないんだ。なんていうかその……」
俺は肺一杯に空気を吸い込んでから今の今まで抱え込んでいた考えを一気に放出した。
「信じられるか！異世界？次元穴？なにそれ？なにその未来系ＳＦファンタジー。どこのゲーム？メーカーは？使い古されたネタ持ち込みやがって。売れねえよそんな話！」
もうダメだ。こんな突拍子の無い話に付き合ってられねえ。三文小説の設定みたいな話を延々聞かせやがって。こんな痛い子拾って何やってんだ俺。面倒臭いにも程がある。
とにかくこの子は現実と空想の区別の付かなくなった可哀想な子でファイナルアンサーだ。意識も戻ったみたいだしとっとと家からお引取り願おう。
「何を言っているの？やっぱり翻訳機が対応できていないの？」
やけくそ気味に叫ぶ横で叫ぶ横で件の少女が、黒い小さな機械をいじくり回している。
悪い事は重なるとは昔からよく言われているが、今日ほどそれを実感した日は無い。俺がそいつを家からたたき出そうと口を開きかけた時、ドタドタという足音が聞こえ、勢いよく部屋のドアが開いた。
「ちょっとお兄ちゃんうるさいよ！何一人で、叫んで……その人だれ？」
入ってきたのは、中学入学以降俺にチョコをくれなくなった実妹、昌子（しょうこ）だ。中学生らしい幼い顔だが、雑誌のモデルをやっていたお袋の血を色濃く受け継いでいるので身内贔屓なしで整った顔をしている。さぞ学校でモテることだろう。俺はというと地味だ。恐ろしく地味だ。多分親父に似たのだろうさ。遺伝子の馬鹿野郎。
その妹の問いに俺は暫し逡巡し、そして、
「ひ、拾った」
地雷を踏んだ。

「ひ、拾った？ど、どこで？」
答えに納得がいかないのか怪訝そうな顔をする昌子。
「家の前に倒れてて、それであれだ、持ってきた」
途端昌子の顔が引き攣る。
「ど、どうするのよ。その人……」
「わからん」
その様子の一部始終を眺めていた少女、いやラティ、だっけか。
とにかくそいつが口を開いた。
「#ë%ゝЯ〇л？」
出てきたのは訳の分からん文字列だ。さっきまで普通に話してたじゃん、お前。
「外人？」
昌子は突然の奇襲に目を白黒させるとクルリと背を向けて階段を駆け下りていってしまった。
「お母さん！お兄ちゃんが外国人の女の子家に持って帰って来た！」
家中に響くくらいの声量で響くその言葉が聞こえた時、思った。
面倒だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5537x/

グッドライフ？

2011年10月19日02時10分発行